

蘆花青春文学の虚と実『思出の記』と「『黒い眼と茶色の目』」

布川 純子

I 『思出の記』

1、はじめに

明治 33 年 3 月 23 日～34 年 3 月 21 日「国民新聞」に連載された徳富蘆花の小説。

2、これまでの評価と問題点

評価定説

一種の立身出世の成功物語で明治の青年の健全な成長物語

- ・市民意識の上昇期に折よく重なったことと、主人公の没落した名家再興という設定→時代的共感
- ・主人公の波乱万丈の軌跡は、社会、人間、生活、時勢といったものを描きつつ、社会下層にも目を向けている点←明治 33 年前後の文学界において、文体なども含めて相対的に評価すれば、社会小説として有数
- ・光明小説と呼ばれる主人公の向日性←豪農出身
- ・キリスト教に触れ、最初の直線的な家再興・立身出世の目標が変質していく物語
- ・主人公が母の折檻に答えた初一念を貫いた作品とはいえない。それよりは立身出世を切望して邁進していた主人公が、耶蘇教を知り、自然の慰藉に触れることによって神を意識し、慈愛心に立脚した人生観を喚起させられた
- ・ディケンズに感化されて書いた他律的→内的必然性に乏しい。

主人公の内部精神の掘り下げ不足。  
通俗的

3、創作動機

小説を書いた直接の動機は、

「作家が世に認められて自信が裏書きされると、必ず自家を語る、という常例に漏れず、熊次（蘆花）は自己のあるものを語るべく『思出の記』を書いた。今春横浜で買って来た書の中に、ヂツケンスの David Copperfield があった。（略）あらめ屋の藤の椅子で初めて D, C, に読み耽けつた熊次は、笑ったり、涙ぐむんだり、而して自分も書かうといふ念を起さずに居れぬ人であった。而して彼は終に『思出の記』を書き始めた。」（『富士』（第 2 巻第 20 章（1））

- ・蘆花自身「負け犬」の地位から独立することが出来た喜び→執筆動機として大きい。

4、『思出の記』と蘆花の人生との内容比較

★最初に慎太郎のことを書き、その後に蘆花のことを（ ）に入れて並べてみる。

○家は酒造家で妻籠一の豪家である。

## II 『黒い<sup>眼</sup>と茶色の目』

### 1、始めに

明治19年6月から翌20年12月までの約1年半の間に、数え19歳から20歳にいたる蘆花が体験した恋愛事件を、それから27年後数え47歳の蘆花が大正3年9月から10月にかけて書き、同年12月13日新橋堂から刊行した告白小説。

すでに『不如帰』『思出の記』『みみずのたはこと』の作者として名声を得ていた蘆花が、何故ここでこういう告白的小説を書かなければならなかったのか。また、この作品は如何なる経緯を経て成立したのか。

### 2、発表するまでの経緯

明治20年の暮京都を出奔し熊本に居る時に「過ぐる一年半の顛末」を書き、一旦書き終えたもののすべて破棄した。

22年に上京して再び「京都のEpisode」を書き始め、「薄葉罨紙三百枚程の一冊」にまとめた「春夢の記」→38年12月焼却。

23・6 翻案小説「石美人」『国民新聞』①

25・8 「夏の夜がたり」『国民新聞』②

①②とも素材や事件は異なるが、久栄への思いが反映。

この恋に関する蘆花の思いは消えることなく続いていたが、真正面から書いて発表する機会はなかなか訪れなかった。（『富士』（全集第16巻P.13～P.15）

明治23年1月新島襄が死ぬ。

26年7月山本久栄が死ぬ。

大正3年5月、父一敬が死んだ。

事件の一番の関係者と心配をかけることを恐れた相手が居なくなり、蘆花小説化へ。  
←新たな難関として蘆花にのしかかってきたのが、夫人の愛子であった。

『蘆花日記』にはその時の経緯がかなり克明に記されている。